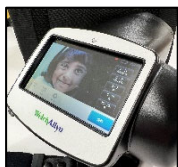


事業名	子どもの視覚認知評価の実施および個別支援の提供	事業ID	2020557663
助成機関	公益財団法人日本財団	事業期間	2021年4月1日～2022年3月31日
評価機器	スポットビジョンスクリーナー/その他（〔実施予定〕視覚認知評価及び読み書き機能評価）		
活用機器	iPad(フォントサイズ変更・背景色とフォント色の変更)/キーボード/音声入力/書類作成アプリ/ (Bluetooth/Wi-Fi対応) ポータブルプリンタ/ (Bluetooth/Wi-Fi対応) ポータブルスキャナ		
目的	活用事例をもとに一般化し、例示として公表することで具体的な支援方法を普及する		

評価機器の活用について

[スポットビジョンスクリーナー]



視機能の基本的な機能（近視、遠視、乱視、不同視、瞳孔不同、（非対称な眼位））について評価を実施。視機能的な課題を評価、抽出した。視機能の苦手なところを把握し、環境設定に必要な情報のベースとして活用。

[その他（必要に応じて実施していくもの）]

ICT機器やアプリ、周辺機器などの活用において、こと受験に関してはハードルが存在します。

代表的なハードルは支援実績です。実績がないと認められない傾向があります。実績は主に過ごす場所である学校で実績を積むことが現実的です。そして多忙を極める担任や支援員の先生方が手伝わなくても、自分で多くをできることが最適です。加えて、苦手の根拠や医師の意見書が必要となることもあります。本人に目的や意欲があり、検査があれば実施し、支援の必要性を明確にする場合があります。

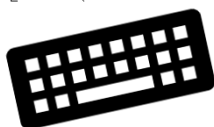
学校の紙課題はポータブルスキャナもしくは写真を撮って、学校で使われる「ロイロノート」や「GoodNote」で取
り込み、書き込んでいきます。そしてポータブルプリンタにて印刷したり、データ送信にて提出します。これらを自分で行え

るように支援します。必要に応じて取ったものをOCR機能にて読上げられるようにすることで、子どもの情報アクセス能力は格段に上がり、着実に調べて、読んで、知るという過程により読み経験は急上昇します。書きに関しては対象児に最も最適な機器や持っている環境に合わせた設定、アプリの活用のために検索、支援ができることが求められます。

1)	WAVES-Digital	視覚認知評価
2)	STRAW-R 改訂版 標準読み書きスクリーニング検査	読み書き機能評価
3)	読み書き評価 URAWSS II (ウラウス)	
4)	英単語評価 URAWSS-English	
5)	標準読書力診断テスト	
6)	包括的領域別読み能力検査 CARD	
7)	LD-SKAIP	
8)	LCスケール 言語・コミュニケーション発達スケール	
9)	LCSA 学齢版 言語・コミュニケーション発達スケール	
10)	特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン チェックリスト	

支援環境の構築と子どもによる主体的な機器の活用について

[iPad(フォントサイズ変更・背景色とフォント色の変更)/キーボード/音声入力/書類作成アプリ/



[キーボード]

(Bluetooth/Wi-Fi対応) ポータブルプリンタ/ (Bluetooth/Wi-Fi対応) ポータブルスキャナ]
書きの苦手に対して、上記のように検査を行うことも多いですが、本来、必要なのは必要な苦手を補い、主体的に行動できる環境にすることです。どんどん活用し、できること、新しい機能を知り、自分の能力に変換する力をつけること、放っておいても勝手に適切に使えることです。

今は多くの入力方法があり、キーボードだけではなく、音声入力、アプリ（フリック入力・フラワー入力ATOK）、肢体不自由児などでは視線入力もあります。そして対象児の持つ環境と能力で最適化する必要があります。また読みについては、視覚的な苦手をフォントを大きくしたり、フォント種や色を変化させたり、背景を黒など、文字を白などに行ったりすることなど直接的な環境整備を行ったりします。しかしそれが功を奏さない場合も多く経験します。

読みの苦手を子どもには、積極的に音声での読み経験を補償することが有効な場合もあります。聞く方が分かりやすい傾向を示すことが多くあるからです。

読み書きが特徴手に苦手な子どもの進歩はゆっくりであり、トレーニングは本人の苦痛が伴う場合が多くあります。有効かつ短時間でのトレーニングもあります。最適なものを模索しながらも、上記のような機器を積極的に取り入れ、自分で使えるような状態にすることで、子どもが勝手に自分をトレーニングする（先述の情報アクセス頻度の向上）形を取ることが最優先だと実感します。

読むことで語彙や文法的な理解の経験値など、多くの要素を経験し、自分の力に変換することに繋がるからです。ICTをはじめとして、次々と更新されるテクノロジーにより、能力の補完だけではなく、有効なトレーニングも変化していきます。今回、例示にて報告した、受験での活用を進めるもの以外でも、読み書きという生活上、欠かせない力を最適に支援できる支援者が求められる機会は事業内でも多く経験しました。支援者としてもアンテナを高くする必要性を常に感じています。